



Title	1965年5月9日の「黙禱」放送：ソ連における戦没者追悼行事の創造
Author(s)	半谷, 史郎
Citation	スラヴ研究, 66, 191-204
Issue Date	2019-09-10
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/84279
Type	bulletin (article)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	66_08_Hanya_shirou.pdf (本文)



[Instructions for use](#)

[資料]

1965年5月9日の「黙祷」放送

—— ソ連における戦没者追悼行事の創造 ——

半谷史郎

はじめに

プーチン政権の下でロシアの愛国ナショナリズムが強まる中、独ソ戦（ロシアでいうところの「大祖国戦争」）が新たな関心を集めている。革命記念日（11月7日）の恒例行事だった赤の広場の軍事パレードが戦勝記念日（5月9日）に移ったことに象徴されるように、ソ連時代の社会主義に代わる国家の統合理念として大祖国戦争の勝利が浮上しているからだ⁽¹⁾。その際、戦争そのものよりも、戦争をどう記述し記憶するかが問われているのが特徴である⁽²⁾。

本論もこうした関心を共有するが、現代政治ではなくソ連史の立場から一石を投げたい。ここに紹介するのは、これまで全く注目されてこなかった戦勝記念日の行事——戦没者追悼の「黙祷」放送である⁽³⁾。

「黙祷」(Минута молчания) 放送とは、1965年にはじまった戦勝記念日の恒例番組である。テレビとラジオの全放送が一斉に流す共通番組で、午後6時50分に始まって、まず戦没者を追悼する祈りの言葉がつづいた後、午後7時の時報を合図に一分間の黙祷を呼びかけるものだ。戦勝20周年の記念日だった1965年5月9日は、午前10時からモスクワの赤の広場で軍事パレードが行われているが、午前のパレード中継と夕方の「黙祷」放送がこの日の二枚看板だった(図1参照)。

戦勝記念日というと今は軍事パレードの印象が強いが、意外なことにソ連時代は例外的な出来事で、1965年の後は1985年と1990年にしか行われていない(戦勝記念日のパレードの定例化は1995年から)⁽⁴⁾。一方、「黙祷」放送は、1965年の放送が大きな反響を呼んで恒

-
- 1 近年の研究の一例として、西山美久『ロシアの愛国主義：プーチンが進める国民統合』法政大学出版局、2018年；「ゲオルギーのリボン」や「不滅の連隊」といった近年あらわれた戦勝記念日のシンボルのことは、『ゲンロン7』（ゲンロン社、2017年）の「特集 ロシア現代思想Ⅱ」を参照。
 - 2 代表例として、橋本伸也『記憶の政治：ヨーロッパの歴史認識紛争』岩波書店、2016年；立石洋子「現代ロシアの歴史教育と第二次世界大戦の記憶」『スラヴ研究』62号、2015年、29-57頁。
 - 3 ニーナ・トゥマルキンが1994年刊の著書『生者と死者』において、ブレジネフ時代に急速に政治的権威を獲得する独ソ戦の記憶を〈大祖国戦争「崇拜」〉と名付けて様々な事例を紹介しており、「黙祷」放送にも触れている(1985年の様子はpp. 33-38、1990年の様子はp. 201)。ただビデオ録画がまだ一般的でなかったためか、いずれも大まかな概略を述べるにとどまる。映像も含めた総合的な分析は、おそらく本論が初めてだろう。Nina Tumarkin, *The Living and the Dead: The Rise and Fall of the Cult of World War II in Russia* (New York: Basic Books, 1994)。
 - 4 ソビエト政権が実施した軍事パレードは、1918年5月1日のメーデーが最初(ただし場所はホディンカ原)。その後は場所を赤の広場に移し、何年かの試行錯誤を経て、5月1日と11月7日

НАШ ОТДЕЛ СПРАВОК

Что передаст радио

9 мая
ПЕРВАЯ ПРОГРАММА. 8.15 — «С добрым утром!». 9.00 — Передача, посвященная празднику Победы (по всем программам). 13.00 — «Где же вы теперь, друзья-однополчане?». Концерт по заявкам участников Великой Отечественной войны. 14.00 — Программа радиостанции «Юность». 15.00 — «Солдат возвратился домой». Концерт по заявкам. 16.00 — У микрофона международные обозреватели. 16.45 — Песни Великой Отечественной войны. 17.00 — «Да разве об этом расскажешь, в какие ты годы жила». Выпоем заявкам женщин — героинь труда и Героев Советского Союза. 17.30 — «Фронтовой юмор». 18.20 — «Подвиг народа». 18.50 — **МИНУТА МОЛЧАНИЯ. СВЕТОЙ ПАМЯТИ ПАВШИХ В БОРЬБЕ ПРОТИВ ФАШИЗМА.** (по всем программам). 19.10 — Симфония чешкий концерт. 19.30 — «Сегодня мой народ ликует и поет». Праздничный концерт. 21.15 — Концерт мастеров искусств. 22.30 — «Праздничные огни освобожденных столиц». Концерт.

На экранах телевизоров

9 мая
ПЕРВАЯ ПРОГРАММА. 9.45 — Москва. Красная площадь. Военный парад, посвященный 20-летию Победы над фашистской Германией. 11.30 — Трансляция военного парада из Праги, посвященного 20-летию освобождения Чехословакии от фашизма Советской Армией. 13.15 — Репортаж о военно-морском пара-

де. Передача из Владивостока с помощью спутника связи. Видеосвязь при помощи искусственного спутника Земли «Молния-1». 14.00 — «Говорят городагерои». 14.55 — Спортивный праздник, посвященный 20-летию Победы над фашистской Германией. Передача с Центрального стадиона имени В. И. Ленина. 16.45 — Первенство страны по футболу. «Спартак» (Москва) — «Динамо» (Тбилиси). В перерыве — Телевизионные новости. 18.30 — Телевизионные новости. 18.50 — **МИНУТА МОЛЧАНИЯ. СВЕТОЙ ПАМЯТИ ПАВШИХ В БОРЬБЕ ПРОТИВ ФАШИЗМА.** 19.05 — «Поезд милосердия». Художественный фильм. 20.30 — «Ракеты на страже мира». 21.00 — «Салют Победы». Репортаж с Красной площади. 21.07 — Телевизионные новости. Праздничный выпуск. 21.25 — «На огонек». Праздничная программа.

ВТОРАЯ ПРОГРАММА. 16.30 — «На просторах Родины». 16.50 — «Цветущая юность». Концерт детской художественной самодеятельности. 17.20 — «Третья ракета». Художественный фильм. 18.40 — Московские новости.

18.50 — **МИНУТА МОЛЧАНИЯ. СВЕТОЙ ПАМЯТИ ПАВШИХ В БОРЬБЕ ПРОТИВ ФАШИЗМА.** 19.05 — Московские новости (продолжение выпуска). 19.20 — А. Галич «Походный марш». Телевизионный спектакль. В перерыве (20.00) — «Спокойной ночи, малыши!».

Сегодня в театрах

КРЕМЛЕВСКИЙ ДВОРЕЦ СЪЕЗДОВ — объявленный на утро Концерт ансамбля «Березка» переносится на 23 мая (утро). Видеы действительны; вечер — Лебединое озеро.
БОЛЬШОЙ ТЕАТР — утро — Рыцарство; вечер — Война и мир.

Какая будет погода

Сегодня и в последующие двое суток в Москве и Московской области сохранится теплая погода без осадков. Ветер юго-восточный, температура днем 17—19 градусов тепла, 10 и 11 мая температура ночью 4—9 градусов, днем 14—19 градусов тепла.

Наш адрес: Москва, улица «Правды», 24

ТЕЛЕФОНЫ: справочное бюро редакции — Д 1-73-86; Издательство — Д 3-31-11.

Ордена Ленина типография газеты «Правда» имени В. И. Ленина.

Б 02884.

50102.

Изд. № 822.

図 1: 1965 年 5 月 9 日付『ブラウダ』のテレビ・ラジオ欄

例になり、以後途切れることなく毎年続いている (2003 年から放送時間は短縮)。軍事パレード以上に戦勝記念日と深く結びついており、ソ連時代の戦勝記念日の受け止め方を探る格好の材料だと言えよう。

本論では、インターネットで公開されている映像史料⁽⁵⁾を素材にして、1965 年の最初の「黙

に実施するのが恒例となった。1965 年のメーデーは、5 月 9 日の戦勝 20 周年記念式典との兼ね合いで軍事パレードは行わず、勤労者のデモ行進のみを実施した。メーデーの軍事パレードは翌年から復活するが、1968 年を最後に行われなくなり、以後、赤の広場の軍事パレードは革命記念日に一本化された。次のドキュメンタリー番組も参照: «История военных парадов на Красной площади» в 4-х фильмах. Телеканал Звезда. 2012. [https://tvzvezda.ru/schedule/filmsonline/content/201205021538-Seq. htm/] 以下 URL はすべて 2018 年 8 月 29 日最終閲覧; ソ連時代には次の文献がある。Архинов В. М., Репин И. П. (ред.) Военные парады на Красной площади. М., 1987.

5 ロシアのゴステレラジオ・フォンドが 2018 年 5 月 8 日に公開 Минута молчания. Памяти павших за свободу нашей Родины в годы Великой Отечественной войны (1965) [https://youtu.be/N72XV7RLEis]

「黙禱」放送について分析考察を行う。その際、関係者の回想⁽⁶⁾ やいくつかの公開史料も援用することで、大祖国戦争をめぐる記憶にとって1965年が転換点だったことを確認したい。

1. 戦勝記念日の歴史

1965年の「黙禱」放送を考察する前に、まずそこに至るまでの戦勝記念日の歴史を概観しておこう。

スターリンの存命中、戦勝記念日はとりたてて特別な日ではなかった。1945年と46年こそ休日(нерабочий день)だったが、47年から平日扱いに戻っている⁽⁷⁾。こうした今から見て冷淡な扱いは、これがスターリン神格化の絶頂期だったことを考えると納得がいく。

この時期、戦勝を語ることは「天才的戦略家」スターリンを讃えることだった(その証拠に1946年から50年まで、5月9日の『ブラウダ』は1面にいつも大きなスターリンの写真が載っている⁽⁸⁾;1949年の映画「ベルリン陥落」も参照)。勝利の栄光はスターリンに帰すべきもので、軍人の功績も国民の苦しみも軽々に口にできない。戦勝の最大の功労者ジュコーフ元帥ですら47年に左遷されたし、戦争の犠牲者数(国民の7分の1にあたる2700万人)はスターリンの言うがままに700万人とされた。

だからスターリンがいる限り、戦勝は過去の記憶になりえず、生々しい現実の一部であり続ける。このため戦勝記念日は日常に埋もれて次第に色褪せていった⁽⁹⁾。

1953年にスターリンが死ぬと、戦勝記念日にも変化が生じる。

1955年5月8日、モスクワのボリショイ劇場で党と政府主催の戦勝10周年記念式典が行われた。ブルガーニン首相の開会の辞に続いてコーネフ国防第一次官が基調演説をしたが、どちらの演説も、戦勝とスターリンとの結びつきを断ち切ろうとする意図が見て取れる。ブルガーニンはスターリンに触れることなく勝利への国民の貢献を語ったし、コーネフのスターリン言及は一度だけ、しかも党に命じられて動く指導者の一人と描いている。つまり、翌年のスターリン批判を先取りする形で、「天才的戦略家」スターリンと分かちがたく結び

6 「黙禱」放送の制作の中心にいたイラーナ・カザコワの回想は、複数の出典が確認できる。初出は *Очерки по истории Российского телевидения*. М., 1999. С. 121-127. (*Месяцев Н.Н.* *Горизонты и лабиринты моей жизни*. М., 2005. С. 521-531. に再録) = 以下 A 版と略称。細部が異なる別テキストは、*Казакова И.* “Признаюсь, я больше никогда не смотрю эту передачу”// *Журналист*. 2005. №5. С. 59-61. (このテキストはネット公開されている: «Минута молчания» [http://www.tvmuseum.ru/catalog.asp?ob_no=12899]) = 以下 B 版と略称。2011年6月26日のテレビ・ニュースでは同じ内容を本人の肉声で確認できる *Кайстро Д.* *Главный символ сопротивления* [<http://old.vesti7.ru/archive/news?id=27123>]

7 戦勝記念日の休日扱い解除は、まず1947年5月に発表され、次いで年末のソ連最高会議幹部会令で恒常化した。このときの幹部会令が同時に1月1日(新年の祝日)を休日に指定しているのので、戦勝記念日の政治的意義は新年に及ばないと見なされたことになる。 *Известия*. 24.12.1947. С. 1. (Старые газеты [<https://oldgazette.ru>] から閲覧)

8 *Бордюгов Г. А.* *Октябрь. Сталин. Победа: культура юбилеев в пространстве памяти*. М., 2010. С. 175. (同書の戦勝記念日に関する部分は、加筆修正のうえ次の本に再録: *Бордюгов Г. А. (ред.)* *Победа-70: реконструкция юбилея*. М., 2015. С. 13-52.)

9 *Бордюгов. Октябрь. Сталин. Победа*. С. 177.

ついた戦勝神話の解体を試みたと言えるのだ⁽¹⁰⁾。

ちなみに、戦勝式典の前日の5月7日は、モスクワ大学の創設200年祭が盛大に祝われている。この日は中央各紙にモスクワ大学への労働赤旗勲章授与の布告が載っていたし、日中はレーニン丘の大学新館前で記念集会在、夕方にはボリショイ劇場で創設200年の記念式典が開かれた⁽¹¹⁾。同じような規模の祭典が二日続けてボリショイ劇場で実施されれば、人びとの注目は戦勝記念日を単独で祝うより半減しただろう。間接的な方法だが、これもまた戦勝神話の解体の試みである⁽¹²⁾。

とはいえフルシチョフ時代も戦勝記念日の祝い方に大きな手直しがあったわけではない⁽¹³⁾。戦勝記念日の位置づけが大きく変わるのは、戦勝20周年だった1965年である。

まず、この年から記念式典の報告者が最高指導者に格上げされた。以前は例えば1955年式典のコーネフ国防次官のように二線級の人物だったのに、1965年の戦勝20周年記念式典はブレジネフ党第一書記が演説している。報告テキストもこの時から内外の政治情勢を総括した重要文書と見なされるようになった⁽¹⁴⁾。また、記念式典だけでなく赤の広場で軍事パレードを行って、戦勝記念日の政治的な意義を高めた。戦勝にまつわる軍事パレードは、1945年6月24日の戦勝記念パレード（捕獲したドイツ軍旗を次々とレーニン廟に奉納する場面で有名）以来のことだ⁽¹⁵⁾。

政治面の格上げと並ぶもう一つの大きな変化は、「英雄都市」という称号の制定である。モスクワ、レニングラード、ヴォルゴグラード、キエフ、セヴァストポリ、オデッサ、ブレスト要塞の七つが祖国防衛の貢献を讃えられて「英雄都市」に認定された（ブレスト要塞は「英雄要塞」）⁽¹⁶⁾。ソ連における最高の名誉である「英雄」称号は、個人の偉業を称えるソ連邦英雄（1938年制定）や経済・文化面の個人の功績を称える社会主義労働英雄（1927年制定の労働英雄を発展解消して38年に制定）、さらには母親英雄（1944年制定、10人以上の子供を生み育てた母親に授与）が以前からあったが、そうした英雄称号を人間ならぬ大地にまで広げて適用した。各都市を擬人化して戦勝への貢献を称えたのである。いわば「戦勝の列聖」だった。

10 西山美久『ロシアの愛国主義』110-112頁；*Бордюгов*. Октябрь. Сталин. Победа. С. 178-181.

11 МГУ имени М.В. Ломоносова: от юбилея к юбилею: 200-летний юбилей Московского университета 7-13 мая 1955 г. [<https://www.msu.ru/jubilee/alljub1955.html>]

12 *Бордюгов*. Октябрь. Сталин. Победа. С. 181-182.

13 *Пивоваров Н.* О праздновании Дня Победы в 1955 и 1965 гг. Документ 1 [<http://www.worldwar.ru/o-prazdnovanii-dnya-pobedy-v-1955-i-1965-gg/>]

14 *Бордюгов*. Октябрь. Сталин. Победа. С. 189-191.

15 ただし戦勝記念日の軍事パレードは、「はじめに」で述べたように、この年だけの例外である。その後は戦勝40周年の1985年まで行われていない。軍事パレードをもっぱら革命記念日の行事としつづけたのは、ソ連体制の正統性や権威の源がロシア革命にあったからだ。*Бордюгов*. Октябрь. Сталин. Победа. С. 189-191.

16 「英雄都市」の名称自体は、1945年のメーデーの祝砲を命じた1945年5月1日の最高司令官令の中で、激戦地だった4都市（レニングラード、スターリングラード、セヴァストポリ、オデッサ）を他と区別して「英雄都市」と呼んだことに由来する。キエフは、1961年の「キエフ防衛勲章」制定に際して英雄都市と呼ばれた。モスクワとブレストが英雄の名を冠して呼ばれるのは、1965年が初めて。その後さらに6都市にこの称号が与えられたので、英雄都市の総計は13である。

その後1967年にクレムリン脇のアレクサンドロフスキー庭園に戦没者の追悼施設（「永遠の火」がともる「無名戦士の墓」、英雄都市の名を刻んだモニュメント）が完成し、戦勝記念日に政府首脳が献花する習慣が確立する。このころから戦没者の追悼が宗教的な色彩を帯びていった。スターリングラード戦の激戦地だったヴォルゴグラードのママイの丘にも同じく1967年に巨大な複合追悼施設が完成しているが、そのシンボルたる「祖国の母」像は、明らかに聖母が重ねあわされている⁽¹⁷⁾。

モスクワの無名戦士の墓に刺激されて、全国でこれに倣った追悼施設が次々と建設された。各地に永遠の火を核とする儀式の場が整備された結果、5月9日を迎えるたびに人びとはそこに詣でて花を手向け、戦没者に思いを馳せることになる。こうして戦勝記念日は国民的な行事になっていった。

戦勝記念日が人びとに身近なもの（ボルジュゴフの言う「人間の顔をした戦勝記念日」⁽¹⁸⁾）になる背景には、この年から戦勝記念日がふたたび休日になったことも影響している（1965年の戦勝記念日の催事を定めた1965年3月30日付の党幹部会決定には「全国民の祝日」として祝うために休日化するとある⁽¹⁹⁾）。なお国際婦人デー（3月8日）の休日化も、この年の戦勝記念日にあわせて発表されたが、その理由の一つに「大祖国戦争時の祖国防衛におけるソビエト女性の傑出した功績」を挙げている。

このように1965年の戦勝20周年は、国民感情への配慮が垣間見える。戦勝記念日の当初の図式が、すべてはスターリンのおかげだったのとは対照的である。「大祖国戦争勝利20周年記念メダル」が作られて従軍した将兵全員（約1640万人）に贈られた⁽²⁰⁾のもそうだし、戦勝記念日を前に完結した六巻物の『大祖国戦争史』の最終巻が、スターリン存命時に700万人と称していた戦争の犠牲者数を2000万人と記したことも、大きく言えば国民感情への配慮と位置付けられるだろう。

以上、戦勝20周年の1965年におきた変化を、政治面の格上げ、宗教的性格の付与、国民感情への配慮の三点で整理してみた。本論が紹介する「黙祷」放送も1965年におきた変化の一つだが、先んじて言えば、宗教的性格の付与と国民感情への配慮の観点が強く感じられる。この点を以下で詳述したい。

2. テレビ・ラジオの「黙祷」放送

死者を悼んで、多数の人が合図とともに一斉に黙祷する儀礼は、第1次大戦後のイギリスで生まれた。英領南アフリカのケープタウンで行われた「三分間の中断」という追悼儀礼と、米国ニューヨークで行われたルーズベルト元大統領の葬儀の際の「一分間の黙祷」とに着想を得て、英国の独自性を出すために「二分間の黙祷」として、1919年11月11日に実施し

17 *Бордюгов*. Октябрь. Сталин. Победа. С. 187-189.

18 *Бордюгов*. Октябрь. Сталин. Победа. С. 187.

19 *Пивоваров Н.* О праздновании Дня Победы в 1955 и 1965 гг. Документ 2 [<http://www.world-war.ru/o-prazdnovanii-dnya-pobedy-v-1955-i-1965-gg/>]

20 Юбилейная медаль “Двадцать лет победы в Великой Отечественной войне 1941-1945 гг.” [<http://mondvor.narod.ru/MPobeda20.html>]

たのが始まりである⁽²¹⁾。

ちなみに日本で行われている黙祷は、このイギリスからの伝来だ。1921年のイギリス訪問時に黙祷を経験した裕仁親王（後の昭和天皇）が、関東大震災の一周忌の追悼行事として1924年に東宮御所で「二分間の黙祷」をしたのが最初だという。その後、黙祷は学校や軍隊を通じて日本各地に広まり、時間も一分間となって定着した。アジア太平洋戦争が激化して排外的風潮が強まった際、キリスト教起源の儀礼は廃止すべきだと神祇院が提言したが、「黙祷は日本人の日常生活に融合、慣習化されている」として却下され、その後も続けられた⁽²²⁾。

一方、ソ連で1965年に始まった戦没者追悼の「黙祷」放送は、一放送人のアイディアに由来する⁽²³⁾。1965年2月のことだが、中央テレビ局のコメンテーターだったイラーナ・カザコワは、上司から何か戦勝20周年の企画を考えるように言われた⁽²⁴⁾。思いついた「一分間の黙祷」のアイディアに上司が賛同し、すぐさま草稿がラジオ・テレビ委員会議長のメーシャツェフに回された。メーシャツェフは党宣伝部のヤコヴレフの了解を取り付けると⁽²⁵⁾、自身を座長とする作業グループをつくって作成に取り掛かった。

最初にできあがったのは、ラジオの音楽構成だった。黙祷中の一分間をどうするか、無音状態で放送に穴があくのを避けるにはどうしたらいいか頭を悩ましたが、ポリショイ劇場の倉庫に眠っていた鐘で革命歌「同志は倒れぬ」を演奏し、荘厳な儀式（торжественная литургия）を演出することで切り抜けた。

続いて、朗読のテキストができあがる。ほぼ一か月にわたって推敲を繰り返し、細部を慎重に吟味したテキストは、祈りを思わせるものだった。ただ問題は、朗読を誰に任せるかだった。耳になじみのあるアナウンサーでは日常的すぎるし、俳優の芝居がかかった調子では祈りが台無しになる。結局、無名のアナウンサー、ヴェーラ・エニューチナに白羽の矢が当たった。「ヴェーラ、あなた祈ることはできる？」「どうかしら、やってみるわ」——こうしたやりとりが続いて録音された朗読の音声は、「黙祷」放送の開始を告げるレヴィタン⁽²⁶⁾の声や、すでに出来ていた音楽と組み合わせられ、ラジオ用の音源が完成した。試聴した関係者は、誰もが目頭をおさえ、人目をばからず涙したという。

当初はラジオとテレビで別々の番組を考えていたが、ラジオ版のこれ以上ない出来をみて、

21 粟津賢太『記憶と追悼の宗教社会学：戦没者祭祀の成立と変容』北海道大学出版会、2018年、129-134頁。「二分間の黙祷」の様子は、波田永実「「セノタフ」考：戦争記念碑と無名戦士の墓から見た集合的記憶形成の諸問題」『流経法學』11巻2号、2012年、107-109頁。

22 粟津『記憶と追悼の宗教社会学』135-138頁。

23 以下、特記以外は前述（註6）したイラーナ・カザコワの回想に基づく。

24 党書記局が1965年2月9日に戦勝20周年の催事に関する党幹部会決定案を取りまとめているが、放送局の動きはこれとは別に進行していたと考えるべきだろう。Пивоваров Н. О праздновании Дня Победы в 1955 и 1965 гг. Приложение 2.1 [http://www.world-war.ru/o-prazdnovanii-dnya-pobedy-v-1955-i-1965-gg/]

25 ヤコヴレフの事前同意に言及しているのは、カザコワ回想のB版のみ。

26 ソ連を代表する男性アナウンサー。重要な公式声明の読み上げを任されており、独ソ戦中はスターリンの命令や日々の戦況報告を読んでいた。

ラジオとテレビで共通の番組をつくることになった⁽²⁷⁾。

だが映像も難題だった。記録映像をつないで戦争の悲惨な場面をつけてみたが、音と映像がまったく噛み合わない。トイッセの有名な戦時ポスター「母なる祖国は呼びかける」を思わせる女優を選び、黒づくめの服を着せてテキストを読ませてみたが、芝居がかってしまう。行き詰まって暗礁に乗り上げていたのを救ったのは、メーシャツェフの一言だった。「画面は火だけでいい。ゆらゆらと燃える炎だ」⁽²⁸⁾

「黙祷」放送に映す火は、スタジオで本物の火を燃やした。御影石を思わす高い壁を立て、下の方に石膏でつくったお椀を置き、そこにガス管を通して火を燃やす。カザコワはモニターに映る火を見ながら、「まさにこれだ、火が注意を釘付けにして、意識を集中させる。祈りと音楽が火と溶け合って、心の奥底までゆさぶる三位一体になっている」と思ったという⁽²⁹⁾。

1965年4月20日、メーシャツェフが党中央委員会に「黙祷」放送の実施許可をもとめる文書を送っている。ヤコヴレフを通じて党中央の同意が伝えられたのは、4月28日のことだった⁽³⁰⁾。

3. 「黙祷」放送のテキストと音楽配置

以上のような経緯でできた1965年の「黙祷」放送を実際に見てみよう。日本語字幕つきの映像を用意したので、適宜参照して欲しい。なお字幕の日本語は、技術的な制約で、以下の訳文と一部異同があることをお断りしておく。

後の分析のために、テキストは段落分けをして、映像の進行時間を注記した。

[0:03]

■コールサイン

[0:13]

27 この部分はA版（メーシャツェフ）による。

28 永遠の火が燃えるモスクワの無名戦士の墓ができたのは、「黙祷」放送から2年後の1967年である。つまり、メーシャツェフは永遠の火とは無関係に燃える炎を着想したことになる。ちなみに、1964年発行との記載がある戦勝20周年の記念絵ハガキにも燃える炎が描かれている。*Щербина С. Видение или видение для Победы? // Бордюгов. Победа-70. С. 530, 532.* 火を拜むゾロアスター教という宗教があるように、火は宗教的感覚を喚起しやすい。「黙祷」放送と絵ハガキが期せずして火を選んだのは、火が亡き人を追悼するのに適した普遍的な仕掛けだからだろう。なお1968年以降は、「黙祷」放送も、無名戦士の墓で燃える永遠の火を画面に映すようになった。*Минута молчания памяти павших (1968)* [<https://www.youtube.com/watch?v=HTTcvfpGvv4>]

29 カザコワの言葉はA版による。

30 «ИЗ ГОДА В ГОД РАСТЕТ ВЛИЯНИЕ РАДИОВЕЩАНИЯ И ТЕЛЕВИДЕНИЯ НА НАСЕЛЕНИЕ СОВЕТСКОГО СОЮЗА...»: А.Н. Яковлев во главе сектора радио и телевидения в аппарате ЦК КПСС. 1962-1965 гг. Документ №26 [<http://www.alexanderyakovlev.org/almanah/inside/almanah-doc/1026999>]; メーシャツェフは、社会主義諸国や西欧のメディアにも「黙祷」放送への参加を呼びかけたと書いている。ただ、これが実現した形跡はない。

傾聴、モスクワからです。こちらは、ソ連のラジオ各局と中央テレビです。

傾聴、モスクワからです。

[0:36]

■メトロノームのチクタク音（画面に「戦没者の思い出に」の文字）

[0:58]

■シューマン「トロイメライ」（合唱編曲版）

[1:17]

みなさん。

みなさんの心に、みなさんの記憶に、語りかけます。

思い出そう、戦場から戻らなかった人を。ともに勝利の日を迎えられなかった人のことを。

[1:43]

父や兄、息子、姉、娘——誰かを失わなかった家族はいない。戦争の悲しみに見舞われなかった家はない。どの人も、戦争のトゲが抜けない。母は、息子を思う。その死がどうしても信じられず、人生の最期の日まで、ずっとずっと待ち続けるだろう。子は、父を思う。かすかに覚えているのは、お別れの頬ずりと、たくましい腕で抱き上げてくれた時のこと。春がすぎ、冬がすぎる。次々と歳月はすぎる。でも、あの人たちは、ずっと去った時のまま。いつだって、私たちとともに私たちの中にいる。

[3:12]

血の最後の一滴まで捧げて、わがソビエトの大地を守った人のことを忘れられようか。最後の銃弾が尽きるまで国境線を死守した人のことを。一身をなげうって首都モスクワの防衛に当たり、敵の進入を許さなかった人のことを。レニングラードの人たちの勇敢さは、決して忘れない。スターリングラード、セヴァストープリ、オデッサ、ミンスク、ハリコフ、キエフ、プレストを守り抜いた人たちの功績も、決して忘れない。誰もが決死の覚悟で血路を開き、祖国の死守に献身した。

[4:16]

ヨーロッパの多くの国々の大地で、ソ連の解放軍の血が流れた。ソビエトの勇者の英雄行為の前に、人類は感謝して首を垂れる。ポーランド人、チェコ人、スロヴァキア人、ユーゴスラヴィア人、ハンガリー人、アルバニア人、ブルガリア人、ルーマニア人に哀悼の誠を捧げたい。イギリス、アメリカ、フランスの兵士のことが今も目にうかぶ。ヒトラーと戦って斃れたバルチザンと反ファシズムの闘士に哀悼の意を表したい。

[5:17]

命をおとしたバルチザン遊撃隊と地下活動の英雄の冥福を祈りたい。また、女性、老人、少年少女の活躍は、兵士に並ぶ偉業として私たちの記憶に残っている。労苦をいとわず、一命を賭して

勝利に貢献してくれた。

[5:49]

一分間の黙禱をして、大祖国戦争で亡くなった全ての人を偲びたい。あの人たちは、いつも側にいる。私たちの家、花咲く庭や、新開地の森、子供たちの笑顔の中に。祖国の勝利がもたらしてくれた幸せの中に。

[6:26]

歴史として大切に保管してきた黄ばんだ紙切れに残る走り書きの言葉。「戦場に行く、私のことは共産主義者だと思って欲しい」。これは、共産主義を築くという決意であり、我々への遺言だ。子の世代は、父祖の遺業を受け継いだ。赤旗を高くかかげて進む。レーニンの旗を、革命世代の血で真紅に染まった旗をかかげて。

[7:12]

首^{こゝべ}を垂れて、戦争から戻らなかった息子、父、夫、兄弟、姉妹、同志、友人に思いを致そう。

[7:34]

■チャイコフスキー、交響曲第6番「悲愴」第1楽章の終結部

[8:31]

黙禱のときが来ました。

[8:42]

■クレムリンの鐘が19時を告げる

[9:19]

黙禱！

[9:46]

■革命歌「同志は倒れぬ」

[10:55]

祖国の自由と独立のために戦って斃れた英雄に^{とわ}永久の追憶を。

[11:15]

■ラフマニノフ、ピアノ協奏曲第2番冒頭

[13:07]

■バッハ、「トッカータ、アダージョとフーガ」BWV564より第2曲〈アダージョ〉終結部

[14:15]

■スクリャービン、交響曲第3番「神聖な詩」第3楽章のフィナーレ

4. 分 析

荘厳な儀式を演出し、祈りの雰囲気漂浮させるのが制作者の意図だったが、これは見事に成功している。まずテキストの内容から見ていこう。

「みなさんの心に、みなさんの記憶に語りかけます」と始まった朗読は、戦争で肉親を失った人びとの悲しみに寄り添い続ける。息子を失った母の嘆き。幼い時に父に死に別れ、断片的な思い出しかない子供。どんなに年月がすぎても、忘れることのできない大切な人たち。心の奥底にしまっていた悲しみが、エニューチナのやさしく包み込むような朗読によって、再びうずきだす³¹⁾。

朗読は続けて、亡くなった人たちは祖国を守るために戦った³²⁾、ヨーロッパの解放も彼らの功績であり、その死は無駄でなかったと言葉を継ぐ。東欧の人びと、英米仏の連合軍、レジスタンス、パルチザンなど、戦火に倒れた無数の人びとを列挙し、「一分間の黙祷をして、大祖国戦争で亡くなった全ての人を偲びたい」と呼びかける。

朗読は再び遺族の思いに寄り添い、亡き人たちはいつも私たちのそばにいる、今の幸せな暮らしは戦勝のおかげなのだと言語。そして故人の出征前の走り書き³³⁾を引き合いに出して、故人の遺志を継いで共産主義建設に邁進しようと訴える。

こうしてテキストの字面だけを追うと、個人の悲しみと国家の大義とが相半ばする内容で、ソ連的なイデオロギー臭が鼻につくかもしれない。しかし実際に映像を見ながら鑑賞すると、ソ連色はさほど気にならず、人びとの悲しみによりそった普遍的な祈りが強く印象づけられ

31 こうした遺族の思いは、映画の重要なモチーフになっている。息子を失った母の嘆きは映画「誓いの休暇」（1959年）を、父を失った息子は映画「私は20才」（1965年）を参照。

32 ここに七つの英雄都市が読み込まれているのは、メーシャツェフがヤコヴレフとの事前協議で助言を受けたからだろう。なおヴォルゴグラードは、戦時中の歴史的な呼称に従って「スターリングラード」となっている。前日5月8日にクレムリンで行われた記念式典で、ブレジネフの演説がスターリンの戦争指導に肯定的に言及し、会場も長い拍手で応えた（『毎日新聞』1965年5月9日朝刊）ことを考え合わせると、フルシチョフ時代に全否定されていたスターリンの再評価の布石として、意図的に「スターリングラード」と呼んだ可能性もある。

ヴォルゴグラードをスターリングラードに改称する動きは21世紀に入って何度も盛り上がり、2004年には、モスクワの無名戦士の墓に隣接する英雄都市の記念碑に刻まれた「ヴォルゴグラード」の文字が「スターリングラード」に取り換えられた。西山美久『ロシアの愛国主義』76-80、84-88、91-98頁。

33 この走り書きの言葉は、今では異様に映る。しかし、死地に赴く兵士が我先に入党申請をし、共産党員として死にたいと言った例が数多くあったことを、スターリングラード戦の参加者の聞き取り記録を発掘したヘルベックが記している。Jochen Hellbeck, *Die Stalingrad-Protokolle: Sowjetische Augenzeugen berichten aus der Schlacht.* (Frankfurt am Main: Fischer, 2012), pp. 30-31, 46-51; Хелльбек Й. (ред.) Сталинградская битва: свидетельства участников и очевидцев. М., 2015. С. 42, 65-70.

る⁽³⁴⁾。

「黙祷」放送が、感情をゆさぶり、見る者を釘付けにするのは、カザコワが言うように、画面にうつる火が大きな役割を果たしている。また、エニューチナの祈りを思わせる語り口も重要だ。だが一番大きいのは、音楽の力ではないだろうか。以下、音楽に話題を絞って「黙祷」放送を分析してみよう。

まず第一に指摘したいのが、一分間の黙祷が宣言される〔9分19秒〕前後で効果的に用いられる鐘の音である。

クレムリンの鐘が19時を告げた〔8分42秒〕あとレヴィタンの合図で黙祷に入り、しばらく無音状態が続く。火への注目だけでは間がもたなくなりかけたころ〔9分46秒〕、鐘の音で革命歌「同志は倒れぬ」が奏される。広く知られた革命歌だが、「死者の苦しみの過去を振り返り、大衆の名誉と自由のために誠実に潔く戦ったことを称え」⁽³⁵⁾の内容は、戦没者の追悼にふさわしい。再びレヴィタンの声が響く〔10分55秒〕が、そのあとに訪れた静寂の中から、はじめはひっそり静かに、次第に音量をあげてラフマニノフのピアノ協奏曲第2番がはじまる。主題呈示部に先駆けて奏される、この導入部の和音連打は、正教の鐘の音を模したことで有名である。

このように一分間の黙祷の前後は、鐘の音を共通のモチーフにして構成されている。カザコワ自身は、「同志は倒れぬ」の箇所を念頭に、鐘がこの一分間のドラマ性を際立たせると説明するだけだが、三回続けて鳴り響く「鐘の音」にはもっと大きな意味を読み取ることができる。

鐘は、19世紀から20世紀のロシア音楽を養った源泉の一つであり、民族の特徴を示す源泉にもなっている⁽³⁶⁾。鐘がロシアと切り離せないのは、ロシア正教が鐘に特別な位置づけを与えていたからだ。儀式の進行を肉声の合唱で行い、オルガンなどの楽器を一切使わないのが正教だが、教会の鐘楼に設置された鐘だけは例外で、その演奏が独自の芸術領域にまで発展している。日常の儀式で使うだけでなく、「大きな祭日や葬式・結婚式などのために特別に技巧的な鐘の音楽が奏される」こともあった(引用文の強調点は筆者)⁽³⁷⁾。

つまり黙祷の前後に鳴り響く鐘は、単にドラマ性を際立たせるだけでなく、宗教的な追悼の雰囲気を作り出す重要な役割を果たしている。また10分55秒からレヴィタンが厳めしい声で唱える「永久の追憶」(вечная слава)は、ロシア正教の故人を弔う儀式の最後に唱えられる「永遠の記憶」(вечная память)を明らかに下敷きにしている。このように一分間の黙祷の前後は、宗教色を前面に出さない形で、ロシア的に死者を追悼しているのだ⁽³⁸⁾。

34 大阪大学外国語学部ロシア語専攻の学生に2018年度の授業でこの映像を見せた時も、そうした感想が多かった。特徴的なものを紹介しておく。「短いものだが、映画をみている気持ちになった」「戦争を経験していなくても、これは泣く」「私はロシア人でもないし、戦争にかかわったこともないのに、心に響きました」

35 小林久枝「《同志は倒れぬ》」日本・ロシア音楽家協会編『ロシア音楽事典』カワイ出版、2006年、234頁。

36 森安達也「表象の変遷:キリスト教典礼を題材として」『ルプレザンタシオン』1号、1991年、92頁。

37 森田稔「鐘」『ロシア音楽事典』73-74頁。

38 カザコワの言う「荘厳な儀式」(торжественная литургия)は、正教色を盛り込んで訳せば「荘厳な奉神礼〔カトリックでいうミサ〕」となる。これも、制作者が宗教ならぬ宗教を追及したこと

第二に指摘したいのが、ロシアとドイツの対置である。

鐘をモチーフにした音楽はラフマニノフで終了し、つづいてバッハのオルガン曲が流れてくる。鐘がロシアを象徴するように、オルガンの響きはプロテスタント（少なくとも非正教の宗教音楽）を想起させる。ロシアとドイツの、ともに宗教的な響きのする音楽を並べて配置したことで、死者を追悼する普遍的な祈りがいっそう純度を増している。全体として見ても、取り上げる作曲家がドイツ（シューマン、バッハ）とロシア（チャイコフスキー、ラフマニノフ、スクリャービン）でほぼ半々になっており、ロシアとドイツに均等に目配りしようという意図が感じられる⁽³⁹⁾。

なお映像にも似たような仕掛けがある。「黙祷」放送には、印象的な風貌の銅像が二つ映し出される。朗読テキストの「母は、息子を思う」に対応して〔2分8秒〕浮かび上がる母の像（図2）と、バッハのオルガン曲が流れる中で〔13分24秒〕浮かび上がる兵士の像（図3）の二つだ。



図2：「黙祷」放送中の「母の像」



図3：「黙祷」放送中の「兵士の像」

前者は、ソ連のリトアニアにある「ピルチュピス村の母」像である。この村では、1944年6月にナチス・ドイツ軍の住民虐殺があった。その犠牲者を追悼するために1960年に建てられた銅像で、63年にはレーニン賞を受賞している⁽⁴⁰⁾。一方、後者は1949年5月8日にベルリンのトレプトウ公園に設置された「解放者の戦士」像である⁽⁴¹⁾。ソ連の東欧「解放」を象徴する像で、戦勝20周年だった1965年には、この像をあしらった記念硬貨（1ルーブル）と記念メダル（前述した「大祖国戦争勝利20周年記念メダル」）が出ている。

二つの銅像を映像に盛り込んだのは、単なるロシアとドイツの対置というだけでなく、国内の犠牲（「ピルチュピス村の母」像）のうえに東欧解放（「解放者の戦士」像）があるという歴史観を含意している可能性もある。とはいえ音楽ではバランスよくロシアとドイツが配

を裏書きする。

39 取り上げた音楽にソ連時代のもの（例えばショスタコーヴィチ）がなく、かろうじて「同志は倒れぬ」が社会主義を想起させるだけなのは注目に値する。また、当時のソ連の音楽界で脇に追いやられていたスクリャービンが重要な役割を与えられているのも興味深い。

40 Пирчюпис в БСЭ. [<http://bse.sci-lib.com/article089333.html>]

41 Вучетич Е. В. Статуя воина-освободителя (Берлин) в БСЭ. [<http://bse.sci-lib.com/particle005237.html>]; 作者のヴチュエーチチは、多数の戦争モニュメントを作ったことで有名。1967年にヴォルゴグラードのママイの丘に設置された銅像群（「祖国の母」像など）も彼の手になる。

置されていたので、勝者と敗者の融和・和解の象徴と見るべきだろう。

最後の三つ目は、一分間の黙祷が終わった後につづく音楽の長さである。レヴィタンが「永久の追憶」を唱えた後、ラフマニノフ、バッハ、スクリャービンと5分近く音楽が鳴り響く（この三つは、ラフマニノフ＝ハ短調、バッハ＝ハ短調、スクリャービン＝ハ長調、と同主調になっており、音楽的に一体感がある）。「黙祷」放送は全体で16分ほどなので、最後の3分の1弱が音楽だけで構成されていることになる。

この点について、後年「黙祷」放送に批判の声が上がった際、カザコフがこう反駁している。「(最後の音楽があれば長いのは)人びとを悲嘆状態から引き出さなければならないからです。……人びとは、故人を偲んでいる間、自分の心と向かい合っています。音楽はそうするのに助けるのです」。これはつまり、エニューチナの語りに心をゆりうごかされ、一分間の黙祷で故人との対話をはじめた人が、ラフマニノフとバッハの「宗教」音楽で長年の心の澱を吐き出し、スクリャービンの勇壮な音楽で現実世界に戻っていく、という意味だろう。

ソ連では「戦争の悲しみに見舞われなかった家はない」。音楽は、その人たちに今の言葉でいうグリーフケアの役割を果たしていた。音楽の長さは、悲しみの深さを、感情の吐露と気持ちの整理に長い時間が必要だったことを意味している。

おわりに：なぜ戦勝記念日を盛大に祝うのか

「黙祷」放送は、大成功に終わった。翌朝カザコフが出社すると、かつて戦車兵だったテレビ技師から握手を求められた。前日の戦友会の集まりで「黙祷」放送を聞いた、全員身じろぎ一つせず、戦中に泣いたことのない男たちが涙を浮かべていたと感謝された。投書も山のように届き、「数百万の人びとの心を動かしたのが分かった」。

こうして「黙祷」放送は、戦勝記念日の恒例番組となった。かくも人びとの琴線に触れる番組になったのは、朗読と映像と音楽が一体となって、戦没者への哀悼の気持ちを宗教的な情感を込めて形にしたほぼ初めての番組だったからだ。戦勝20周年の1965年は、ソ連における戦勝記念日の位置づけが変わり、政治面の格上げ、宗教的性格の付与、国民感情への配慮といった変化が見られたが、「黙祷」放送は、うしろ二つに対応した動き、しかもこの二点を前面に押し出した番組だったと言えよう。

ところで、戦勝記念日の政治面の格上げという変化は、「黙祷」放送と無関係なのだろうか。最後にこの点を考察して、本論をしめくりたい。

1965年から戦勝記念日が盛大に祝われたしたのは、ソ連体制を支える新たなイデオロギーを打ち立てようとしたからだと言われる。イデオロギー担当の党書記スースロフの主導だというのが、ソ連体制の出発点であるロシア革命が次第に遠い過去のできごとになる中、革命の大義と矛盾することなくこれを補完する新たなイデオロギーとして、大祖国戦争がクローズアップされたのだという⁽⁴²⁾。

この図式は、1930年代半ばにソ連の民族政策におきた変化を思い起こさせる。帝政時代

42 Tumarkin, *The Living and the Dead*, p. 132; Пивоваров Н. О праздновании Дня Победы в 1955 и 1965 гг. [<http://www.world-war.ru/o-prazdnovanii-dnya-pobedy-v-1955-i-1965-gg/>]

の負の遺産として長らく否定的に扱われていたロシア・ナショナリズムが、この時期から肯定的に語られるようになった。塩川伸明はこの変化を「民族感情の中の反ソに向かわないような、あるいはむしろソヴェト国家統合に寄与しうるような要素を利用して、それをソヴェト愛国主義に接続し、動員していく」ためだと説明している⁽⁴³⁾。ロシア・ナショナリズムはその後、独ソ戦でさらに肥大化し、ロシア史の英雄とレーニンとが並び称される状態にまで達する⁽⁴⁴⁾。

塩川の説明を下敷きにして1965年の変化を説明するなら、大衆動員に弱点を抱える社会主義イデオロギーを下支えするために、国民感情に深く根を下ろしている戦争の記憶を利用して、それを社会主義に接続し、戦争の犠牲を無駄にせず遺志を継いで社会主義建設に邁進しようと人びとを動員する。これが、1965年から戦勝記念日が盛大に祝われだした理由なのだ。

この点を念頭に、「黙祷」放送を今一度見てみると、テキストの字面だけを追った時に感じた違和感（個人の悲しみと国家の大義とが相半ばする内容で、ソ連的なイデオロギー臭が鼻につく）に別の解釈が可能なのが見える。

「黙祷」放送は、人びとの悲しみに寄り添い、見聞きする者の感情を強くゆさぶる。であるならば、そこに含まれるテキストは、たとえ読んだ時に違和感を覚えるものであっても、朗読と映像と音楽が一体となった圧倒的な力によって、すんなり心に染み込んでいくのではないか。ソ連は巨大な犠牲を払って人類を救済したという戦争観。故人の遺志を継いで共産主義建設に邁進する、その先頭に立つ党の役割。これらを理屈抜きで納得させ、伝承していく。そのような仕掛けとしても、「黙祷」放送は機能していたのではないだろうか。

43 塩川伸明『民族と言語（多民族国家ソ連の興亡Ⅰ）』岩波書店、2004年、62頁。

44 塩川『民族と言語』66頁。半谷史郎「ソ連の民族政策の多面性：「民族自決」から強制移住まで」宇山智彦編『越境する革命と民族（ロシア革命とソ連の世紀第5巻）』岩波書店、2017年、86-87頁。